

自然の仕組みに逆らわない農業

出石地域には、より良い野菜作りをしようとする有機農業に取り組んでいる一人の男性がいます。日々、試行錯誤し、努力を惜しまず取り組む姿。食の安全・安心は、今回紹介するような農業者に支えられているのではないのでしょうか。

中務 喜紹さん(45歳) 出石町口小野

納得のいく野菜作りを目指して

食の安全・安心が叫ばれる昨今、無農薬栽培を基本とする有機農業が注目を浴びています。

この有機農業に取り組む中務喜紹さんは、現在、約220アールの耕地に大根や聖護院カブラ、白菜、麦などを栽培し、年間約13トンの生産量をあげています。

以前は、別の仕事をしていた中務さん。「家族が体調を崩



▲野菜を洗いながら品質をチェックする中務さん

したことをきっかけに健康に気を遣うようになりました。自分で納得のいく野菜を作りたかったんです」と、文字通り畑違いの仕事を始めました。

自然環境と調和する有機農業

有機農業は、遺伝子組換え技術を使用せず、堆肥などの有機質肥料によって地力を高め、病虫害に強い健康な作物を育てるため、化学肥料や農薬に頼りません。さらに適正な輪作(周期的に他品目を栽培すること)や多品目栽培、自然循環機能の増進などによって健康な作物の生育を図り、自然環境と調和した安全で味のよい農産物の生産が期待されています。

一般に、有機栽培は慣行栽培に比べ、収量が低い傾向にあり、手間とコストがかかる

まずは食べてください 有機野菜の良さが分かります



有機栽培された野菜には、このマークが付いています。

厳しいチェック

その目は野菜職人

このような状況の中、中務さんは、厳しい品質基準をクリアするために生じるコスト

といわれ、生産者も少なく有機野菜の価格は割高になっています。それにも関わらず、食に不安を抱く消費者は、有機食品(オーガニックフーズ)への需要を年々高めています。

高のほか、消費者に与える影響や輸入食品との競争など、多くの問題を抱えながら、日々、農作業に当たっています。「単に野菜を作って出荷するだけでなく、作った物一つひとつに責任を持てる物づくりを心がけています」と収穫した野菜を厳しい目でチェックする中務さん。目になわなない物は出荷しないというこだわりよう。野菜作りにかける情熱がひしひしと伝わってきます。

自分が作った野菜を口に する消費者を思っています

有機栽培された野菜は、多少の形崩れはあるものの、肥沃な大地の恵みを受けて野菜本来の味を取り戻し、食せば私たちにさまざまな栄養を

還元してくれます。

中務さんが栽培した野菜は、京阪神へ出荷されるほか、市内のスーパーで販売されています。また、製粉して全粒粉として販売しています。

「いつかは、市全域の小中学校の給食の材料が安全な地元野菜になればいいですね。賄えるだけの収量があるように頑張ります」と目標を持つ中務さんはこう言います。「健康は食から。子どもたちが口にできる食材が安全安心なものであってほしい」。



▲有機農業に取り組む中務さん。忙しい合間を縫って空いた時間の楽しみは、家族と一緒にするスキ



▲収穫した大根。今が旬

保育園に広報マンガがやってきた！ 12

竹野保育園 (竹野)

〈園児48人〉



環境省の日本渚百選と快水浴場百選に選定されている竹野浜のすぐ近くにある竹野保育園。夏には園児たちも海水浴に行きます。

1月7日、同園で毎年恒例のどんど焼きが行われたので、その様子をのぞいてみました。

天気よし!! 今日のはんどんど焼き



今年の抱負を書いた紙を手にした園児たちが園庭に集まると、園長先生がどんど焼き



のいわれを説明しました。

「お正月にお迎えした神様をお送りする日本の伝統的な行事です」。

輪になって今年の抱負を発表しよう

先生がお正月に使ったしめ縄を持ち寄って、ワラなどと合わせて焼き場を作り、それを園児たちが輪になって囲みました。

ワラに火がつくと園児たちは一人ずつ順番に「風邪をひかないように」

「風邪をひかないように」



「友達と仲良くできますように」などの願い事を発表し、紙を火の中へ入れていききました。

どんどんどまで舞い上がる!?



空に向かって舞い上がる紙をいつまでも見送っていました。

縁起物のミカン焼いてみるとどんな味?

しめ縄に付いていたミカンがころんがり焼き上がり、みんなで見せてみました。どんな味がするかな? ちよつと酸っぱかったのか口をすぼめる園児たち。でも縁起物を食べたから、今年1年、健康で過ごせます。



顔輪 笑の

涙誘う人情時代劇

演研サークル「ネコ柳の会」(豊岡)

演研サークル「ネコ柳の会」は、人情味溢れるオリジナル時代劇を披露する市民演劇サークルで、市内を中心に、現在14人のメンバーで活動しています。昭和53年11月に発足し、30周年を迎えました。



▲30周年記念公演で「^{きみだ}顔の母」を演じた劇団メンバー

活動のきっかけは、三江地区文化祭に、演劇好きの住民有志で時代劇を披露したところ。これが大変好評で、「一度だけではもったいない」との声に応え、市内の老人ホームでも披露し、豊岡初の本格的劇団の旗揚げとなりました。

代表の鳴海芳一さん(小田井町)は「自分にはないものを演じる喜び、客席の反響の面白さ、大切な仲間…これらが30年間、自分を支えてきました。これから多くの人に感動を伝えたい。そのためには、若い人に入会してもらい、後継者を作りたいですね」と意気込んでいました。会への問い合わせは、鳴海さんまで。☎23-6797

活動は、定期的には行わず、基本的に公演前に集まる程度。その無理のないところが長続きの秘訣とのこと。老人ホームの慰問や敬老会、ボランティアなど、年に10回程度の公演をこなし、平成7年には、北海道で「杞柳ロード」復活に向けた交流公演、平成12年には、淡路花博でも公演しました。出し物は、主に悲劇、人情物のオリジナル時代劇で、10本の脚本を取りそろえています。「笑わせるのは難しいので、泣かせる芝居ばかりですね」と鳴海さんは話します。